

# 中期目標・中期計画（素案）

京都工芸繊維大学  
平成27年6月26日



## 国立大学法人京都工芸繊維大学の中期目標・中期計画一覧表（素案）

中期目標	中期計画	整理 番号	
<p><b>(前文) 大学の基本的な目標</b></p> <p><b>1. 長期ビジョンー本学の目指すところー</b></p> <p>本学は、その前身校の時代から、工芸学と繊維学にかかわる幅広い分野で、京都の伝統文化・産業と深いかかわりを持ちながら、常に世の中に新しい価値を生み出す「ものづくり」にかかわる実学を中心とした教育研究を行い、また、近年においては、自然環境との調和を意識しつつ、人を大切にする科学技術を目指す教育研究を行い、広く社会や産業界に貢献してきた。</p> <p>21 世紀の知識基盤社会が進展する中、我が国では少子高齢化や人口減少、産業構造の転換等の諸課題を抱えており、同時に世界的には環境問題やエネルギー問題など地球存亡の課題に直面している。本学は、これらの諸課題を解決するための教育研究を行い、第2期中期目標期間までの成果を踏まえ、豊かな感性を涵養する国際的工科系大学を目指す。</p> <p>本学は、これまでに果たしてきた役割を踏まえつつ、長い歴史の中で培った学問的蓄積の上に立って、「人間と自然の調和」、「感性と知性の融合」及び「高い倫理性に基づく技術」を目指す教育研究によって、困難な課題を解決する能力と高い倫理性・豊かな感性をもった国際的高度専門技術者を育成する。</p> <p><b>2. 長期ビジョンの実現に向けて</b></p> <p>20 世紀の過度の「分析主義」への反省から、21 世紀の科学技術には、「総合的視点」に基づく新しいパラダイムが求められている。</p> <p>この新しいパラダイムは、「限りある自然と人間の共生」、「人</p>			

間相互の共生」を追求し、また「持続的社会的構築」という課題に応えるためのものでなければならない。

このような状況を踏まえ、本学は、ものづくりの要である「知」、「美」、「技」を京都の地において探求する教育研究体制によって、それぞれの専門分野の水準を高め、同時に互いに刺激しあう総合的視野に立ち、人に優しい工学「ヒューマン・オリエンティッド・テクノロジー」の確立を目指す。

このため、以下の5つの目標の達成を目指し、長期ビジョンの実現に取り組む。

- ① 国際舞台でリーダーシップを持って活躍できる豊かな感性を備えた創造的技術者の育成
- ② 科学と芸術の融合による新しいサイエンスとテクノロジーの開拓
- ③ 特定分野において卓越した人材を惹き付け知識・技術を生み出す世界的研究教育拠点の形成
- ④ 研究成果の社会実装化による新たな社会的・公共的・経済的価値の創造
- ⑤ 地域社会、産業界の要請に的確に対応できる教育研究活動の展開

### 3. 中期目標設定の基本的考え方と取組みのねらい

第3期中期目標期間を長期ビジョンの実現に向けた飛躍的発展期と捉え、本学の強みや特色、社会的な役割を踏まえ、この期間に重点的に取り組むべき事業を、教育、研究、管理運営などの側面に照らして、事項ごとに抽出し、それぞれの目標を第3期中期目標として設定する。

具体的な計画策定に当たり、特に留意した点は次のとおりである。

- ① グローバル化に対応した教育の高度化

<p>② イノベーション創出のための研究活動の活性化  ③ 地域活性化のための拠点機能の強化  ④ 本学の強みや特色の強化を実現するための組織や制度の構造改革</p> <p>国立大学法人京都工芸繊維大学の第3期中期目標・中期計画は、以下のとおりである。</p>		
<p>◆ <b>中期目標の期間及び教育研究組織</b></p> <p><b>1 中期目標の期間</b>  平成28年4月1日から平成34年3月31日までの6年間</p> <p><b>2 教育研究組織</b>  この中期目標を達成するため、別表1に記載する学部、研究科を置く。</p>		
<p><b>I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標</b></p> <p><b>1 教育に関する目標</b>  <b>(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標</b></p> <p>○ 第2期中期目標期間までに構築してきた学部・大学院一貫型の教育をさらに推進し、地域社会のグローバル化を牽引することのできる国際的・高度専門技術者を育成するための体系的な教育課程を編成する。</p>	<p><b>I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置</b></p> <p><b>1 教育に関する目標を達成するための措置</b>  <b>(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 国際的に活躍できる高度専門技術者を育成するため、学士課程から博士前期課程までの6年一貫教育の実質化を図る（学部3年次までに学士課程の基盤となる専門科目を学生に修得させるとともに、学部4年次生へ博士前期課程の授業科目を提供する等）などにより、「3×3構造改革」（学士・修士・博士の学年構造を実質「3年×3」とする教育プログラム）を推進し、完成させる。</p> <p>○ 本学が養成する TECH LEADER 像（専門的な知識・技術を有し、自らの専門性を発揮して、チームのメンバーとともに解決策を提案・実行できる人材）に求められる能力に基づき、ディプロマポリシーを改定</p>	<p>1-1</p> <p>1-2</p>

<p>○ 課題解決能力や豊かな感性をもった国際的に活躍できる高度専門技術者を育成するために、実践的な方法による教育を充実させる。</p>	<p>し、体系的なカリキュラムを構築する。</p> <p>○ 学士課程で 30%以上の学生に、大学院課程で 60%以上の学生にTOEIC730 点以上（又はこれに相当する能力）を取得させるとともに、4 技能（聞く・話す・読む・書く）の円滑な発達を保証することを目指し、成果の上がる授業、課外セミナー、本学が独自開発したコンピュータベース英語スピーキングテストの定期実施などを有機的に統合した「英語鍛え上げプログラム」を展開する。</p> <p>○ 学士課程において、全ての学生に自らが専攻する専門分野とは別に、人文・社会・自然にわたる幅広く普遍的な知を学習させ、倫理観や歴史観、国際的な視野など人間形成に必要な教養教育を提供する。また、学士課程学生の多様な関心・学習要求に応えるため、京都にある文系・理工学系・医学系の異なる個性の3大学が連携する教養教育共同化を推進する。</p> <p>○ 大学院課程において、海外インターンシップ等の推進及び英語による授業を行う国際科学技術コースを発展的に改組し、新たにグローバルコース（英語による授業のみで修了でき、海外インターンシップへの参加を必須とするコース）の設置やジョイントディグリーを2プログラム以上導入することにより教育の国際化を推進する。</p> <p>○ 大学院課程において、教養教育に係るポリシーを明確にし、デザインや芸術、経営、材料、化学等に加え、京都の伝統文化に関する科目など、多様な分野を俯瞰的に理解し、自らの専門分野でイノベーションを創出し展開する能力を修得させるために、ポリシーに基づいた分野横断型の大学院教養教育プログラムを提供する。</p> <p>○ 海外の企業及び研究機関等における最先端の研究開発・技術開発、協定校での講義等におけるTA（ティーチング・アシスタント）体験、協定校との共同プロジェクトやワークショップによる実践的国際協力・協働体験等を実施するための海外インターンシップ科目や地域課題から国際課題までをテーマにした課題発見・解決型科目などの実践型</p>	<p>1-3</p> <p>1-4</p> <p>1-5</p> <p>1-6</p> <p>2-1</p>
--	--	--

<p>○ 教育課程や学習成果の可視化、厳格な成績評価、海外からの留学生の受入推進等の観点から、国際通用性の高い教務システムを構築する。</p> <p><b>(2) 教育の実施体制等に関する目標</b></p>	<p>の授業科目を充実させる。</p> <p>○ 外国人教員や外国での教育研究歴のある日本人教員が所属する研究室を中心に、「国際化モデル研究室」（常時、留学生やポスドクが複数名在籍し、国際学会での発表等の積極的な国際活動により、学内の国際化を牽引する研究室）を毎年5研究室以上指定し、海外学会での発表や国際的コンテストへの応募等の国際的な活動を推進する。</p> <p>○ 平成 28 年度中に科目ナンバリングの導入に向けた検討を完了し、平成 29 年度に教務システムの改修を行うなど、授業科目の実施主体、レベル、学術分野などを表す科目ナンバリング制度を平成 30 年度までに導入する。（年次進行により平成 32 年度には全ての科目に対して設定を完了する。）導入後も、科目ナンバリングによるカリキュラムの分野や科目の偏りを継続的に点検し、教育課程等の見直しを行う。</p> <p>○ 日本語と英語でシラバスの全項目を併記するなど、留学生と日本人学生の双方に益する国際化を推進するため、教務システムの英語環境を整備する。システムの改修により、大学院のシラバスは平成 29 年度、学部のシラバスは平成 31 年度までに全項目の日英併記への対応を完了する。</p> <p>○ 平成 29 年度までに学士課程におけるG P A（グレード・ポイント・アベレージ）の活用方法の見直しや分野別等の調査・分析を行い、教育改善に活用するとともに、平成 31 年度までに大学院博士前期課程における成績指標に係る諸課題（履修科目の偏り等）に対する対策を講じたうえで、G P Aを大学院博士前期課程に導入する。</p> <p>○ 第2期中期目標期間に試行実施したクォーター制についての効果を検証したうえで、セメスター制とのバランスに配慮しながら、大学院課程におけるクォーター制導入科目を60%以上に推進するなど、柔軟な学事暦の運用により、学習機会の増加、学習効果の向上を図る。</p> <p><b>(2) 教育の実施体制等に関する目標を達成するための措置</b></p>	<p>2-2</p> <p>3-1</p> <p>3-2</p> <p>3-3</p> <p>3-4</p>
--	---	--

<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本学の特色・強みの強化、グローバル化の推進に向けて、優秀な若手、外国人等の教員の重点配置を行う。</li> <li>○ 学生が主体的に学習できる環境を整備する。</li> <li>○ 教育の質を多様な手段で検証し、改善・向上させる。</li> </ul> <p><b>(3) 学生への支援に関する目標</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学生が主体的に学習できる機会を提供する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「デザイン・建築」、「繊維・高分子」及び「グリーンイノベーション」等の本学の特色・強みの強化及び教育のグローバル化の推進を図る観点から、優秀な若手、外国人教員及び外国における教育研究歴のある教員に各課程・専攻を担当させる。</li> <li>○ TECH LEADER（専門的な知識・技術を有し、自らの専門性を発揮して、チームのメンバーとともに解決策を提案・実行できる人材）を育成するための教育機能の強化を図るため、PBL（課題解決型学習）やアクティブラーニングのためのスペースやラーニングコモンズなど、学生が主体的に学習できるスペースを整備する。</li> <li>○ 教育の質を恒常的に検証するため、学生、卒業・修了生、就職先企業、保護者などステークホルダーの意見や期待等を聴取するための体系的な各種アンケートを実施する。これらのアンケートにより明らかになった課題を改善するとともに、改善状況を確認・検証するなど、PDCAサイクルを機能させる。</li> <li>○ 毎年、全教員の4分の3以上の者が必ずFD（ファカルティ・ディベロップメント）活動に参加し、教育力向上のための不断の努力を行うよう教員FD研修会、授業公開による教員相互評価、担当教員による授業評価等を実施する。また、役職者が学生から直接意見を聴取する機会を新たに設け、教育プログラムの改善に学生が参画するシステムを構築する。これらの取組より明らかとなった課題・問題点を改善・解消するとともに、改善等の状況を確認・検証するなど、PDCAサイクルを機能させる。</li> </ul> <p><b>(3) 学生への支援に関する目標を達成するための措置</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 第2期中期目標期間において優れた成果を上げている、体験型アクテ</li> </ul>	<p>4-1</p> <p>5-1</p> <p>6-1</p> <p>6-2</p> <p>7-1</p>
--	--	--



<p>○ 学生目線に立った学習支援・生活支援を実施する。</p> <p><b>(4) 入学者選抜に関する目標</b></p> <p>○ 多様な試験形態により、求める能力、適性を多面的かつ総合的に判断する入学者選抜を実施する。</p> <p><b>2 研究に関する目標</b></p> <p><b>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標</b></p> <p>○ 本学の特色ある工学系専門分野の技術を融合し、イノベーションを創出するための研究を推進する。</p>	<p>イブラーニングやボランティア活動等のサービスマーケティングの推進を目的とした「学生と教員の共同プロジェクト」を引き続き実施するとともに、正規課程外の外国語の運用能力向上のためのプログラムを提供する。</p> <p>○ 各種アンケート等で学生支援に対する学生のニーズを十分に把握し、学生支援（学生個人の特性に応じた学習支援システム「総合型ポートフォリオ」、障がい者支援等）の内容を充実させる。</p> <p><b>(4) 入学者選抜に関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 高大接続改革を踏まえ、志願者の能力、適性や活動歴などを多面的かつ総合的に評価する本学独自の入学者選抜である「ダビンチ（AO）入試」において、募集人員を10%以上増加させる。</p> <p>○ 国際化を図る観点から、英語スピーキングテストの導入など、志願者の実践的外国語運用能力を評価基準とする入試改革を実施する。</p> <p><b>2 研究に関する目標を達成するための措置</b></p> <p><b>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 第2期中期目標期間までに実施した世界一線級の研究ユニットの誘致やプロジェクト研究をさらに推進させ、国内外の卓越した研究者と共同して、本学が実績や特色を有する分野（「デザイン・建築」・「繊維・高分子」及び「グリーンイノベーション」等）の研究を重点的に推進する。それらの研究成果により、例えば、「分野別QS世界ランキング」等の世界的に認知度の高い分野別世界大学ランキングでのランク入りを目指す。</p> <p>○ 昆虫先端研究推進センターにおいて、昆虫科学研究の中核的研究拠点</p>	<p>8-1</p> <p>9-1</p> <p>9-2</p> <p>10-1</p> <p>10-2</p>
---	--	--

<p>○ 産学官の連携を強化し、研究成果の社会実装化を推進する。</p> <p><b>(2) 研究実施体制等に関する目標</b></p> <p>○ 重点戦略分野や融合領域分野の研究を組織的に推進する体制を整備する。</p> <p>○ 教員が効果的かつ効率的に研究できる環境を整備する。</p> <p>○ 若手研究者や女性研究者に対する支援を充実させ、研究活動を活性化させる。</p> <p>○ 研究業績を多面的に検証し、研究の質を向上させる。</p>	<p>として、国内外との共同利用・共同研究を推進する。</p> <p>○ 国内外の大学や企業等と情報交換・意見交換等を実施し、それらを通じて得たニーズと本学のシーズのマッチングにより、社会実装化に繋がるヘルスサイエンス等の分野融合型の研究プロジェクトを推進する。</p> <p>○ 産学官連携コーディネーター等を有効に活用し、グローバルに展開する企業や地域の中小企業等と連携して、戦略的な共同研究・受託研究等を実施し、外部資金の受入額を10%程度増加させる。</p> <p><b>(2) 研究実施体制等に関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 卓越した研究力を有する研究者5名以上を、グローバルエクセレンス（外国人ユニットや若手研究者が所属する教員組織）等に配置し、学内の重点分野の研究を推進する。</p> <p>○ 学系を超えた教員の交流の場の提供やURA（リサーチ・アドミニストレーター）の拡充等により、学内の連携を強化し、分野や職階を超えたチームでの研究を推進する体制を整備する。</p> <p>○ キャンパスマスタープランに基づく学内外の共同利用施設や設備マスタープランに基づく共同利用設備等を計画的に整備し、活用する。</p> <p>○ 若手研究者が能力を最大限に発揮し、自立的な研究を推進できるよう、若手研究者に対する支援（研究費の重点配分等）を充実させる。</p> <p>○ 女性研究者が安心して継続的に研究を推進できるよう、女性研究者に対する支援（出産・育児等で支援を必要とする者への研究支援員の配置等）を充実させる。</p> <p>○ 教員の研究業績を組織的に収集し、多面的な分析に基づき活性化の措</p>	<p>10-3</p> <p>11-1</p> <p>12-1</p> <p>12-2</p> <p>13-1</p> <p>14-1</p> <p>14-2</p> <p>15-1</p>
---	---	---

<p><b>3 社会との連携や社会貢献及び地域を志向した教育・研究に関する目標</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 小中高大連携の推進や社会人教育等により、地域社会の教育に貢献する。</li> <li>○ 本学が有する知的資源を地域産業界に還元し、地域産業の振興に貢献する。</li> <li>○ 地域の自治体・産業界と連携し、地域を志向した教育研究を全学的に推進する。</li> </ul> <p><b>4 その他の目標</b></p> <p><b>(1) グローバル化に関する目標</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「デザイン・建築」・「繊維・高分子」及び「グリーンイノ</li> </ul>	<p>置を講じる。</p> <p><b>3 社会との連携や社会貢献及び地域を志向した教育・研究に関する目標を達成するための措置</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地元教育委員会や市民のニーズを踏まえ、京都府域の小中高等学校への出前授業・体験学習や社会人向け公開講座等を実施する。 16-1</li> <li>○ 技術者の再教育等を図る社会人教育や、中小企業等との定期的な情報交換・意見交換等を通じて得たニーズを踏まえた技術支援・技術指導を実施する。 17-1</li> <li>○ 地域産業のグローバル化に貢献するため、国内外の卓越した研究者を交えたセミナーを平成 28～30 年度においては年 8 回程度、平成 31～33 年度においては年 12 回程度実施する。 17-2</li> <li>○ 地域に関する学習や地元企業等でのインターンシップを充実させ、学校教育 16 年を見通した体系的なカリキュラムを構築する。併せて、若者の地域定着、地域活性化に貢献するため、京都府北部における理工系人材を育成するためのプログラムを開発するなど、地元企業等への就職率を 10%以上増加させる。 18-1</li> <li>○ 地方自治体や地元企業等と定期的な情報交換・意見交換等を実施し、それらを通じて得たニーズと本学のシーズのマッチングにより、京都府域の地域産業振興、文化・芸術振興、まちづくり等に貢献する教育研究を推進する。 18-2</li> </ul> <p><b>4 その他の目標を達成するための措置</b></p> <p><b>(1) グローバル化に関する目標を達成するための措置</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 第 2 期中期目標期間において「デザイン・建築」分野を中心に実施し 19-1</li> </ul>
---	--

<p>バージョン」の3つの分野において、アジア地域の中心となる教育研究拠点を形成し、これまでの実績をもとにさらに先導的試行に挑戦し、我が国の社会のグローバル化を牽引する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 海外の大学・企業等との連絡を強化するため、連携拠点を海外に整備する。</li> <li>○ 外国人留学生の受入、日本人学生の海外留学の双方向での国際交流を推進させる。</li> <li>○ 外国人留学生に対する支援や海外に留学する日本人学生に対する支援を充実させる。</li> </ul>	<p>たユニット誘致をさらに推進し、「デザイン・建築」、「繊維・高分子」及び「グリーンイノベーション」の3つの分野において、世界一線級研究者ユニットを新たに誘致し、国際混成チームでの教育研究を推進する。それらにより、論文全体に占める海外の研究者との共著論文の割合を25%以上とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本学内に日本人学生・外国人留学生・本学教員・誘致研究者等が活発に交流できる場を整備・運用する。</li> <li>○ 海外の大学との派遣・受入に関する調整や海外の企業等との調整等の活動を実施する連携拠点を海外に3カ所以上整備する。</li> <li>○ 国際交流協定について、戦略的に協定校を選定し、協定校数を20%程度増加させる。</li> <li>○ 外国人留学生の受入を推進し、大学院学生に占める外国人留学生の割合を30%以上にする。</li> <li>○ 日本人学生の海外留学を推進し、大学院学生に占める海外留学経験者の割合を25%以上にする。</li> <li>○ 外国人留学生の受入推進に伴い、外国人留学生に対するチューターによる学習支援、宿舎確保等の生活支援、日本企業への就職支援等を実施する。</li> <li>○ 日本人学生の海外留学推進に伴い、海外へ留学する日本人学生に対する留学前の事前教育等の支援、留学先での現地サポート等の支援を実施する。</li> </ul>	<p>19-2</p> <p>20-1</p> <p>21-1</p> <p>21-2</p> <p>21-3</p> <p>22-1</p> <p>22-2</p>
<p><b>II 業務運営の改善及び効率化に関する目標</b></p> <p><b>1 組織運営の改善に関する目標</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学長のリーダーシップにより、本学の強みや特色を生かした</li> </ul>	<p><b>II 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置</b></p> <p><b>1 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 第2期中期目標期間に構築した大学全体に係る運営戦略の企画・立案</li> </ul>	<p>23-1</p>

<p>教育研究・社会貢献等を重点的に実施できる体制を構築する。</p>	<p>・実行体制の下で、学長を中心にガバナンスの機能状況を検証し、検証結果に基づきガバナンス体制を不断に見直す。</p>	
	<p>○ 大学戦略の基礎となる情報の収集及び分析機能等を強化するため、学長をサポートするIR（インスティテューショナル・リサーチ）組織を整備する。</p>	23-2
	<p>○ 監事との定期的な意見交換の場を設けるなど、監事のサポート体制を整備し、監事機能の強化を図る。</p>	23-3
	<p>○ 地域の自治体・産業界や保護者等の学外者の意見を聴取する機会を定期的に設け、それらを通じて明らかとなった大学に対する意見・要望等を大学運営に活用する。</p>	23-4
<p>○ 人事・給与システムを弾力化し、多様な優れた人材を確保する。</p>	<p>○ 「職位比率プロポーシヨン改革」（教授を削減し、助教を増加させる）を実施し、退職金に係る運営費交付金の積算対象となる教員について、40歳未満の助教を25名程度増加させる。</p>	24-1
	<p>○ 年俸制や混合給与による多様な人材の雇用を促進し、国際通用性のある適切な業績評価及び処遇への反映を実施するとともに、退職金に係る運営費交付金の積算対象となる教員について、年俸制適用者を50名以上増加させる。</p>	24-2
	<p>○ 複雑で専門的な業務を支援するため、高度で専門的な能力を有する人材を多様な形態（年俸制・時給制やフルタイム・パートタイム等）で雇用する。</p>	24-3
	<p>○ 国内外の優秀な人材を確保するために、本学独自の財源によるテニユアトラック制度を構築し、教員採用者全体に占める当該制度による採用者の割合を40%以上にする。</p>	24-4
	<p>○ 外国での教育研究歴のある教員を積極的に採用することなどにより、教員に占める外国での教育研究歴のある教員の比率を50%程度にする。</p>	24-5
	<p>○ 女性教職員を積極的に採用し、教員に占める女性の比率を15%以上、職員に占める女性の比率を35%以上にする。また、管理職等の指導的</p>	24-6

<p>○ 能力を研鑽する多様な機会を提供し、教職員の能力を向上させる。</p> <p>○ 全学的な運営戦略に基づき、学内資源を有効に活用する。</p> <p><b>2 教育研究組織の見直しに関する目標</b></p> <p>○ 本学の強み、特色を最大限に強化するための教育研究組織に再構築する。</p> <p><b>3 事務等の効率化・合理化に関する目標</b></p> <p>○ 本学の教育研究・社会貢献機能を強化するために、機動的に法人を運営できる事務組織に再構築する。</p> <p><b>Ⅲ 財務内容の改善に関する目標</b></p> <p><b>1 外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加に関する目標</b></p> <p>○ 安定的な財務基盤を確立し、教育研究を推進させるために、</p>	<p>地位への女性登用を推進し、役員のうち1名以上、管理職の25%以上を女性で登用する。</p> <p>○ グローバル化に対応できる人材を育成するために、年間10名程度の教職員を海外の教育・研究機関に長期派遣する。</p> <p>○ 事務職員・技術職員の能力の向上を図るため、研修等を充実させ、英語の運用能力については、職員に占めるTOEIC730以上のスコア（又はこれに相当する能力）を有する者の比率を20%程度にする。</p> <p>○ 学長のリーダーシップの下で、組織的に検討した運営戦略に基づき、重点的に推進すべき分野・領域に、学内資源を戦略的に配分する。</p> <p><b>2 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 機能強化のために平成27年度までに実施した教育研究組織の各種改革を踏まえ、教育組織・教員組織の在り方について検証し、教育と研究が効果的に連携して実施できる体制とする。</p> <p><b>3 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 事務組織を業務内容により分類し体系化するとともに、業務内容によっては教員と職員合同で構成される組織を設置するなど、教職協働をより一層推進する体制に強化する。</p> <p><b>Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置</b></p> <p><b>1 外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 「収入比率プロポーシヨン改革」（収入に占める外部資金の割合を増</p>	<p>25-1</p> <p>25-2</p> <p>26-1</p> <p>27-1</p> <p>28-1</p> <p>29-1</p>
--	---	---

<p>外部資金の獲得額を増加させる。</p> <p><b>2 経費の抑制に関する目標</b></p> <p>○ 効率的な予算の執行を行い、経費の削減・抑制に努める。</p> <p><b>3 資産の運用管理の改善に関する目標</b></p> <p>○ 大学が保有する資産（施設・設備・資金）の有効活用を推進する。</p> <p><b>IV 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標</b></p> <p><b>1 評価の充実に関する目標</b></p> <p>○ 大学の活動全般について、自己点検・評価、外部評価を充実させ、教育研究の質の向上及び業務運営の改善を図る。</p> <p><b>2 情報公開や情報発信等の推進に関する目標</b></p> <p>○ 教育研究活動の情報を積極的に発信し、大学の知名度を高める。</p>	<p>加させる）を実施し、外部資金（補助金等収入、科研費を含む）の獲得額を収入全体（施設費を除く）の20%以上とする。</p> <p><b>2 経費の抑制に関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 効率的な予算執行を行うとともに、予算執行状況調査や財務指標等による財務分析の活用などにより管理的経費を削減し、原則、一般管理費比率を5%未満に抑制する。</p> <p><b>3 資産の運用管理の改善に関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 学内の施設・設備について、共同プロジェクト研究や大学COC事業等での共同利用を促進し、学内外者の利用を推進する。</p> <p>○ 短期・長期の収入・支出状況を精緻に見積もることにより資金状況を正確に把握し、余裕資金を安全かつ効果的な手段で運用する。</p> <p><b>IV 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置</b></p> <p><b>1 評価の充実に関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 教育研究活動及び管理運営の状況について、定期的に多面的な自己点検・評価、外部評価を実施し、評価結果を業務改善に活用するとともに、その内容を学内外に公表する。</p> <p><b>2 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置</b></p> <p>○ 学内の教育研究成果を迅速に把握・発信できる体制を整備し、広報戦略に基づき、発信する情報内容を充実させるとともに、多様な広報媒体により、多面的な広報活動を行う。</p>	<p>30-1</p> <p>31-1</p> <p>31-2</p> <p>32-1</p> <p>33-1</p>
---	---	---

## V その他業務運営に関する重要目標

### 1 施設設備の整備・活用等に関する目標

- 本学の教育研究・社会貢献機能を強化するために、快適なキャンパス環境を計画的に整備する。

### 2 安全管理に関する目標

- 全学的な安全管理体制を強化させるとともに、教職員及び学生の安全に対する意識の啓発に努める。

### 3 法令遵守等に関する目標

- 学内規則を含めた法令順守や情報管理の徹底を図り、適正な大学運営を行う。
- 研究における不正行為の発生を防止するための管理体制を強化する。

## V その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置

### 1 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

- 機能強化の観点から、改定したキャンパスマスタープランに基づき計画的な施設整備を行う。

### 2 安全管理に関する目標を達成するための措置

- 毒物・劇物の適正な管理を行うため、「化学物質管理システム」への登録を徹底させ、定期的に内部監査を実施して登録・管理状況を確認することにより、全ての試薬の登録を行う。
- 教職員及び学生の環境・安全に対する意識を向上させるため、環境マネジメントシステム研修（EMS研修（学部4年次は参加必須））や防災訓練など環境・安全に関する研修等を年7回以上実施する。

### 3 法令遵守等に関する目標を達成するための措置

- 構成員の法令順守に対する意識を向上させるための研修等を年1回以上実施する。また、情報セキュリティ基本方針に基づき、情報セキュリティ対策を継続するとともに、啓発のための研修等を年1回以上実施する。さらに、法令順守や情報管理についての内部監査を定期的の実施し、監事による総括を行う。
- 研究倫理の向上を図るため、教員や学生に対し研究倫理に関する研修等を年1回以上実施する。実施にあたっては、理解度テストを継続的に実施し、研修の効果の把握・改善等に活用する。また、博士論文等に対し、ソフトを用いた不正引用チェック等を実施するなど、研究不正防止のための管理体制を強化する。

34-1

35-1

35-2

36-1

37-1



<p>○ 研究費の不正使用の発生を防止するための管理体制を強化する。</p>	<p>○ 「公的研究費の不正防止計画」及び「公的研究費の不正防止等対応マニュアル」を必要に応じて見直すとともに、公的研究費の適正な使用に関する研修等や内部監査を実施する。</p>	<p>38-1</p>
--	---	-------------

中期目標	中期計画														
別表 1 (学部、研究科等) <table border="1" data-bbox="159 320 857 416"> <tr> <td>学部</td> <td>工芸科学部</td> </tr> <tr> <td>研究科</td> <td>工芸科学研究科</td> </tr> </table>	学部	工芸科学部	研究科	工芸科学研究科	別表 (収容定員) <table border="1" data-bbox="931 320 2101 644"> <tr> <td>学部</td> <td colspan="2">工芸科学部 2, 432人</td> </tr> <tr> <td>研究科</td> <td colspan="2">           工芸科学研究科 1, 200人           <table border="1" data-bbox="1509 504 2067 616"> <tr> <td>うち修士課程</td> <td>1, 020人</td> </tr> <tr> <td>博士後期課程</td> <td>180人</td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	学部	工芸科学部 2, 432人		研究科	工芸科学研究科 1, 200人 <table border="1" data-bbox="1509 504 2067 616"> <tr> <td>うち修士課程</td> <td>1, 020人</td> </tr> <tr> <td>博士後期課程</td> <td>180人</td> </tr> </table>		うち修士課程	1, 020人	博士後期課程	180人
学部	工芸科学部														
研究科	工芸科学研究科														
学部	工芸科学部 2, 432人														
研究科	工芸科学研究科 1, 200人 <table border="1" data-bbox="1509 504 2067 616"> <tr> <td>うち修士課程</td> <td>1, 020人</td> </tr> <tr> <td>博士後期課程</td> <td>180人</td> </tr> </table>		うち修士課程	1, 020人	博士後期課程	180人									
うち修士課程	1, 020人														
博士後期課程	180人														